

## 中高年の身体機能低下は糖尿病の発症リスクの上昇につながる

糖尿病と身体機能低下リスクとの関連は、これまでに複数の横断研究や縦断研究によって指摘されている。しかし、糖尿病患者における身体機能低下に関心が寄せられている一方で、身体機能低下症例における糖尿病発症リスクの検討という逆方向からの視点での研究はほとんどない。そこで本研究では、米国の51歳以上の住民を対象とした縦断調査のデータに基づき身体機能低下とその後の糖尿病発症のリスクについて検討した。研究開始時点で糖尿病未発症であった22,878人を対象に、平均8.7年間追跡した。機能低下については、日常生活動作の遂行能力に関する参加者自身の回答に基づき評価し、なし、軽度、中等度、重度の4つに分類した。研究開始時に機能低下がみられたのは9,649人(41.2%)、追跡期間中に新たに機能低下となったのは8,175人(35.7%)であった。また、追跡期間中に糖尿病を発症したのは3,546人(15.5%)、死亡は5,869人(25.6%)であった。統計学的分析の結果、機能低下レベルごとの糖尿病発症の相対危険度は、機能低下がなかった群と比較して軽度群で1.28、中等度群で1.43、重度群で1.63となり、機能低下と糖尿病発症との間に用量反応関係が認められた。

したがって、中高年ではたとえ軽度の機能低下であっても、その後の糖尿病の発症リスクの有意な上昇につながることを示唆された。また、中高年の身体機能低下を予防することで糖尿病発症率の低下させる可能性もある。

出典：Diabetes Care. 2014; 37(4):1032-1038